

振り向きもしない。笑顔すらない。なぜ私は無視されなければいけないのか。

昨年夏から一年間の英国留学での出来事だ。当初から私は積極的に話しかけ、多くの友人を作ることができたが、こちらから話しかけても、名前を尋ねても無愛想に立ち去ってしまう子がいた。イギリス人の彼女は他の白人の人とは楽しそうに話す。だが私を含めたアジア人を極端に嫌っていた。同じ空間にいるのに、まるで私の存在がかき消されたような扱いをされた。明らかなる人種差別話には聞いたことがあったが、自らが実際に経験したことであまりの深刻さと辛さを痛感し、とても悔しかった。その時はどう対応するべきなのか全く分からず途方に暮れていた。

しばらくしてホッケーの学校対抗試合でのこと。彼女とチームメイトとして団結できるかとても不安だった。しかし、試合中は差別のことなど忘れて試合に集中し、自然と彼女とも名前を呼んでパスを出し、声を掛け合うことができたのだ。結果的に試合に勝利し、彼女から笑顔でハイタッチを求めにきてくれて、お互いをたたえ合った。手が重なると同時に心も重なったような気がした。その日を境にクラスでも気軽に会話を交わし、心が通じ合えるようになった。チームメイトとして共通のゴールに向かって挑んだことで、人種、肌の色など

全く関係なくお互いの人間性を認め合い、そして信頼関係を築くことで差別は乗り越えられることを体験した出来事だった。

最近、何人もの黒人の人たちが警察官に理不尽に殺害されたことで、黒人差別問題がアメリカをはじめ世界中で改めて注目されている。また、大坂なおみ選手が、警察官などに殺害された七人それぞれの名前を書いたマスクをつけて全米オープンテニスに臨んだことが話題になっているが、私は彼女の行動を通して、彼らが何のためらいもなく殺害されたことを初めて知った。ニュースなどでは大々的に取り上げられないだけで、今もなお世界中で多くの人々が差別を受け苦しんでいる。黒人というだけで人命が軽んじられて簡単に殺害され、また殺害した人が罪に問われない。そんな世の中であっていいのか。差別をする側の人は外見のみで人を判断し、自分と見た目が異なるというだけで、人格や考え方など中身を知ろうともしない。本来、人の命に軽重などあるはずはなく、一人ひとりは何物にも代えがたい尊い存在だ。人種や肌の色は各人の個性であり、それは何よりも美しく、尊ばれるべきものである。人の内面、考え方は外見だけでは何も分からない。コミュニケーションをとって心を通わせることで初めて、その人の美しさ、尊さが理解できるのだ。人種や肌の色を超えてお互いを尊重し合うことで、いつの日か人種差別のない世界が現実となるだろう。

大坂なおみ選手が、スポーツに政治問題を持ち込まないという常識を打ち破り、一人の黒人女性として人種差別の問題提起を行い、個々人が考えるきっかけを与えてくれた。私自身も差別を受けた身として、自らが人種差別の根深さやその問題の大きさに改めて気づくことができた。この深刻な問題を人類共通課題として周りに認識してもらうために自らが行動を起こし、周りを巻き込んでいきたい。今こそ私たち一人ひとりが人種差別撲滅に立ち上がるときだ。